

脚音が梁を揺らすとき

八田 悠



受賞のことば

競馬と建築という純粹に自分が好きなことについて思考し、エッセイを書いている時間は心から楽しく、幸せでした。同時に自分の学生生活を静かに振り返る時間でもありました。残り一年少々と学生生活も短くなり、終盤に一つの形として成り遂げられて本当に嬉しいです。評価してくださった皆さまに心より感謝申上げます。

最後に、支えてくれた家族や友人、彼女への感謝を胸にこれからは自分が誰かを支える側になろうと思います。

秋の夕暮れ、競馬場からの帰り道。駅のホームに吹き込む風が、胸の奥でまだ蹄音を響かせていた。
「競馬って、建築に似てるかも」
誰かに言われたわけでもない。ただ、体のどこかがそう呟いた。構造設計者を志す大学院生として、私は日々、解析と図面に向き合っている。鋼材の断面に働く応力を読み解き、接合部の剛性を確かめ、建築物の「かたち」「から」のバランスを探っている。けれど私にとっての建築とは、それだけではない。夕暮れの光がガラスに反射し、長い影が床を走る瞬間や、風の抜ける通り庭の曲線にこそ、建築が生きていると感じれる。「構造が骨なら、意匠は血のめぐりだ。どちらかが欠けても、建築は生きられない。そして、競馬もまた、感情と論理の両輪で成り立っている」

最初に競馬に心を奪われたのは、2022年の秋。

当時、私は大学2年生だった。大学では建築学科に所属していたが、何を専門にしたいのかも、どんな将来を描けばよいのかも、まるで見えなかつた。ただ、周囲の学生たちは各自の道を着実に進みはじめていて、自分が取り残されていくような感覚に陥っていた。やりたいことが見つからない焦燥感と、自分には何もないという無力感が、日常のあらゆる場面に忍び込んでいた。そんなある日私は、父のすすめでなんど

なくテレビをつけた。家族そろつて競馬を見るなんて、それまでの私には考えられないことだった。画面に映つたのは、芝をひたすら逃げる一頭の馬。パンサラッサだつた。道中はまるで独走。後ろを突き放して、ひたすら前へ、前へ。最後の直線、猛然と差してくるイクイノックスとダノンベルーガの影が見えたとき、心臓が高鳴つた。逃げ切れるか？いや、差されるか？

家族の誰もがテレビの前で声を上げ、私も気づけば、身を乗り出していた。最後のゴール板を駆け抜けたとき、私の中に残つたのは、勝敗ではなく「こんな世界があつたのか」という驚きだつた。ただのギャンブルじゃない。ただのスポーツでもない。あのとき私が魅せられたのは、競馬という『物語』だつた。その時から私は競馬に夢中になつていった。

競馬を知つていくほど、その世界の奥深さにのめりこんでいった。予想の根拠になる情報の多さ、騎手や調教師の駆け引き、馬の個性と展開の綾々。「こんなに知的で、ロジカルで、ドラマチックな世界だつたのかも」と、驚かされた。初めはレース映像を楽しむだけだつたが、やがて私は展開予想や馬の調子、血統や馬場状態まで分析するようになつて行った。建築で培つた「構造的に考える力」が、競馬の世界でも自然と働いていた。その翌月、思い出深いレースがもうひとつ生

まれた。ジャパンカップでのヴエラアズールの末脚だ。最内に閉じ込められていたその馬が、ほんの一瞬の隙をついてスルリと抜け出し、ゴール前で差し切つた。あの時の「ここしかない」という瞬間の動き。絶望的に見える最内の進路から、ほんの一瞬の隙間を突いて差し切つた。思考よりも先に体が動くような、一か八かではない精密な判断。競馬には、人生に似た一瞬の選択がある。そんな気づきが、私の中に深く刻まれた。

やがて初めて訪れた東京競馬場。年が明けて、ひと月ほど経つ頃だ。興奮氣味にゲートをくぐつた私が、まず目を奪われたのは、馬ではなかつた。巨大なスタンド、空へせり出す屋根、整然とした動線。何万人もの観客が自然に誘導される、あの建築のダイナミズム。私は馬よりも先に、その空間に飲み込まれていた。

「これも建築なんだ…」

意匠としての美しさ、構造としての合理性、そして何より人の心を動かす『場』としての完成度。設計演習の課題で煮詰まつていた私にとって、それは建築の可能性そのものだつた。

大学3年の春。私の生活はいまだに競馬と共にあつた。しかし大学3年生は大学生にとつて選択の時期でもあった。就職活動を始めるべきか、それとも大学院へ進んで、深く学ぶべきか。研究室配属が迫る中、私

プロフィール
東京理科大学大学院在学中。現在は勉学と就活に励む日々。趣味は競馬と体を動かすこと。今年の年末にはハーフマラソンに挑戦。建築図面と馬券に夢を描く。好きなサブレッドはヴェラアズール。

の胸の中には漠然とした進路への迷いがあった。明確な答えはなく、日々の時間だけが静かに過ぎていった。就活サイトの通知が鳴るたびに、胸の奥がざわついた。皆と同じレースに出ているはずなのに、自分が後方で、進路を探すばかり。踏み出す場所さえ、見つけられなかつた。そんな時期でも、週末になると私は競馬場へ足を運んだ。建築の課題に追われながらも、レース前のざわめきと、馬たちの躍動には不思議と心が澄んでいた。馬券を買いに来ているというより、答える出ない問い合わせるために、あの場所に通つていたのかもしない。その日、目を引いたのは、一度も人気になつたことのない地味な一頭だつた。ストレートは決して速くない。道中も後方のまま。それでも、直線で少しの隙間を見つけると、ためらうことなく突っ込んで、ゴール寸前で差し切つた。

そう思つた。進路という言葉は、競馬では、「走るための道」を意味する。そのとき私は、初めて「進路を選ぶ」ことは、「進路をこじ開けること」でもあるのだと感じた。しばらくして、私は研究室を訪ね、大学院進学の相談をした。

「学びきつていらないものを残して社会に出ることの方が、たぶん後悔します」

そう話す自分の声が、少しだけ強くなつた気がした。あの馬が、進むべき道を「走つて」見せてくれたように。競馬はただの娯楽ではなかつた。迷つたとき、立ち止まつたとき、もう一步前へ出る勇気を、教えてくれる存在だつた。

大学4年生になると、私は建築の鋼構造の研究室に所属した。鋼構造のなかでも、とくに「鉄骨ブレークス」に関心を持ち、力の流れや座屈の特性、復元力の挙動を追いかける日々が始まつた。研究内容は地味だ。^{じせきだ} 解析モデルとにらめっこしながら、剛性と韌性のバラ

ンスを評価する。構造の合理性と、美しさの両立をどう実現するか、そういう問いつと、静かに向き合つていく。ある日、研究室で出馬表を眺めていた私に、同期が冗談交じりに声をかけてきた。

「また競馬？ 研究進んでるの？ やらなきゃやばいんじゃない？」

そう言われた私は、スケッチブックにトラス構造の図を描いて答えた。

「逃げ馬が前に行くと、他の馬の位置取りが変わる。力の流れが変わつて、展開全体が動く。構造も同じ。どこに荷重が加わるかで、全体の応答が変わつてくるんだよ」

彼は少し呆れながらも、

「お前、真面目に競馬やつてるんだな」

と笑つた。研究室内では、競馬は「個人の楽しみ」から少しずつ「誰かと分かち合う時間」へと変わつていった。ふとしたきっかけで同じ研究室に競馬を語れる仲間がいることを知つたとき、嬉しさと驚きが同時に込み上げた。「今週の中山、馬場荒れそうだよね」「ドウデュース、もう一段ギア上がつた感じするな」

そんな何気ない会話が、深夜の静かな研究室の空気を和らげた。実験、データの整理や解析モデルの修正に追われる合間、パドックの様子や展開予想を語り合う時間が、いつのまにか小さな息抜きになつていて。建築の専門性を追求する空間のなかで、競馬という共通言語が生まれ、競馬が一つのコミュニティーを生んでくれた。

『建築と競馬』

違うようで、どこか似ている。どちらも「人が思いを込めて、何かを支える構造をつくる営み」なのだ。競馬とは、私にとつて何だつたのか。ギャンブルではない。ただのスポーツでもない。それは、「感情の構造」だと思う。構造設計が、見えない力の流れをかたちにするように、競馬は目に見えない人と馬の思いを脚音に変える。その音が響くたび、私はまた建築を学びたくなる。

そんな日々の中で迎えた、大学院入試。私は進学を目指していたが、心は不安でいっぱいだつた。研究室配属後は解析と実験に追われ、準備も思うようにはまらない。「落ちるかもしれない」「自分には無理かもしれない」夜になると、ネガティブな感情が頭の中をぐるぐる路になれるような建築を。

ると回つた。そんな弱音が脳裏をよぎるたび、私はあるレースを思い出していた。2022年のジャパンカップ。ヴェラアズールが、最内で進路のない状況から一瞬の隙を突いて差し切つた、あの走りだつた。粘るシャフリヤール、内に進路がない、絶体絶命、なのに、馬体をわずかにねじ込み、光が差し込むようにゴールを駆け抜けた。

「瞬を逃がさなければ、可能性はある」
気づけば、私はそう自分に言い聞かせ、机に向かっていた。研究も入試も、すべてがうまくいくわけではない。それでも諦めずに前を向く、その勇気を私は馬たちからもらつた。

現在、私は大学院生として建築構造を学びながら、日々、解析モデルや文献と向き合つてゐる。平日には研究室のデスクで試験体を設計しながら、夜には解析モデルを作成している。忙しい毎日だが、心の底から樂しいと思えている。進学を決めた選択は間違つてはなかつたと思う。そして週末、ふとした時間に見るレース結果は、もはや娯楽ではなく、「思考の拡張」になつてゐた。